

Juichi WAKISAKA Race Report

2012 AUTOBACS SUPER GT Round 7 -SUPER GT IN KYUSHU 300km-

◆◆ ハプニングを乗り越え、5位フィニッシュを達成！ ◆◆

No. 39 DENSO KOBELCO SC430		
Drivers	Qualifying	Final
脇阪 寿一 / 石浦 宏明	15位	5位

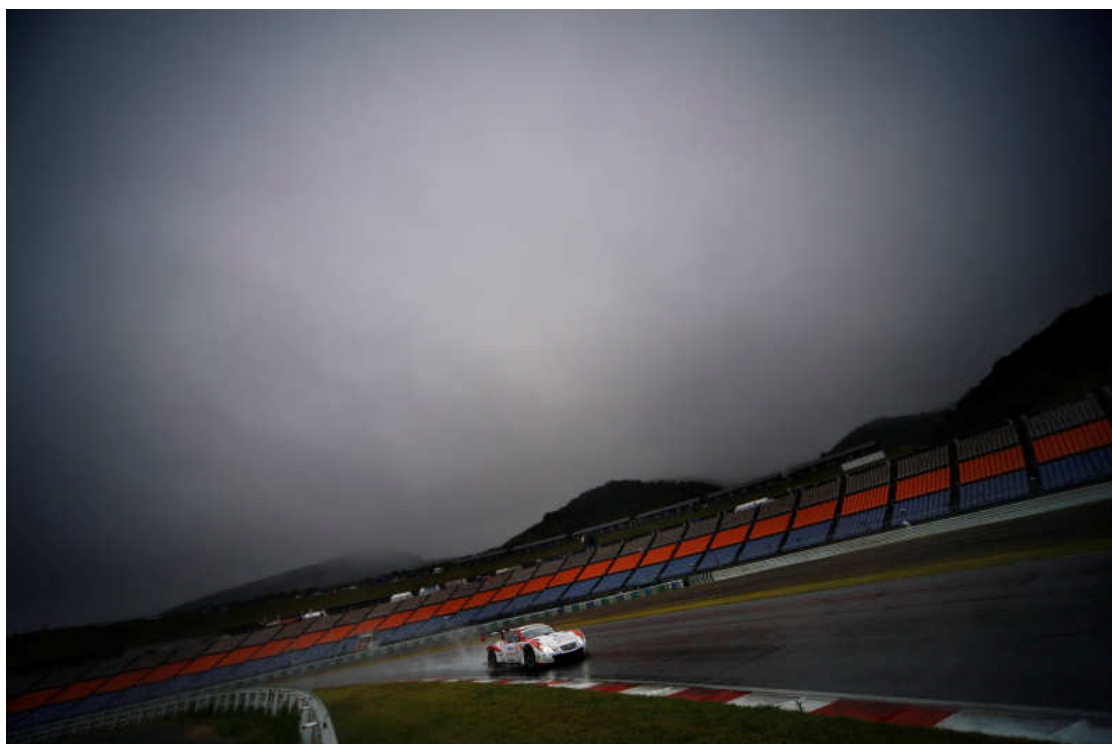
開催日：2012年9月29日-2012年9月30日

サーキット：オートポリス（大分県日田市、コース全長：4.674km）

レース距離：65周（303.81km）

入場者数：予選日11,200名、決勝日21,100名、合計32,300名

シリーズも残すところあと2戦となった2012年のSUPER GT。シリーズチャンピオンを巡る天王山の争いが行われるのは、九州大分にあるオートポリス。「毎レース、地元レースファンの温かい応援に見守られ、頑張ることができる」と脇阪もこの地でのレースを歓迎する。その一方では、台風17号が日本列島に接近中というニュースを気にしながらのレースウィークを迎えることになった。ウェットコンディションで迎えた予選では、思うようなポジションが得られず15番手に甘んじることになり、また決勝でもまさかのハプニングがNo.39 DENSO KOBELCO SC430を襲ったが、チーム一丸となって、また脇阪自身も高い集中力を見せてレースをマネジメント。5位でフィッシュを果たしている。



■ 9月29日(土)

09:00-11:00 公式練習
14:15-14:30 ノックアウト予選 (Q1)
14:50-15:00 ノックアウト予選 (Q2)
15:25-15:35 ノックアウト予選 (Q3)

【公式練習】 4番手 / 1'46.691

泣きそうな空ながらもまだ雨は落ちていなかった早朝から一転、午前9時から始まった公式練習では、すでに本格的な雨模様となったオートポリス。時折強い風が吹き、また気温も路面温度もこの季節としては低い15度/16度というコンディションの中、セッションが行われた。

前回の富士で「まるでクルマに悪いムシが居るみたい」とコメントした脇阪。その後、栃木・ツインリンクもてぎでのテストを含め、その“ムシ”は果たして駆除されているのだろうか？ 9時から10時40分まで行われたGT300クラスとの混走セッション。雨量が増える中、まず石浦選手が走行をはじめ、慎重にクルマの確認を行っていく。コンディションに合わせたクルマのセットアップ、そしてウェットタイヤの確認など、実に様々なチェックを次々とこなしていった。

時間の経過とともに幸いにして雨量が減り、コンディションも安定。それに合わせるかのようにどの車両もタイムアップを始めた。No.39 DENSO KOBELCO SC430も石浦選手から脇阪へとドライバー交代。まずクルマのフィーリングを確認し、その後はチームベストタイムを更新する走りを披露。4番手のタイムとなる1分46秒691のタイムをマークし、不安定な天候の中で力強い走りができるということをライバルたちにアピールした。

後半、GT500の専有走行時はあいにく雨量が再び増えることになり、タイムアップは果たせなかったが、チームでは雨の状況に合わせたクルマの確認を中心に行い、セッションを終えている。



【ノックアウト予選 (Q1)】 15番手 / NO TIME

今回の予選方式も、鈴鹿、富士に続いてのノックアウトが採用された。Q1からQ3まで3度のセッションを経て決勝グリッドが決定する方式。オートポリス戦では初めての採用となる。チームはこれまで同様、Q1を石浦選手、Q2を脇阪、そしてQ3で

再び石浦選手という作戦を選択し、予選セッションを迎えた。

降り続ける雨の影響で、気温、路面温度ともに朝からほとんど変わらず、肌寒さを覚える中、GT500のQ1が午後2時15分から始まった。雨量は次第に増えてきており、ひと足先に行われたGT300のQ1では足下をすくわれる車両も少なくないほどだった。先の読めない天候をにらみつつ、石浦選手がピットを離れた。

アップダウンのあるオートポリスのコースにクルマを進めた石浦選手。しかし、セクター3のターン14付近でまさかのハイドロプレーニング現象が起こり、コントロール不能となったクルマはコースオフを喫してその先のタイヤバリアへ。幸いバリアへの接触は僅かではあったが、このアクシデントでコースには赤旗が提示され、セッションは中断することに。マーシャルカーによる救助でコースに戻ったクルマは自走してピットへと戻ることは叶ったものの、赤旗の原因となったNo.39 DENSO KOBELCO SC430にはルールによってその後の出走は認められない。タイムも抹消となり、この時点でNo.39 DENSO KOBELCO SC430の予選はすべて終了。結果、15番手からの決勝スタートを迎えることになってしまった。

自身、予選アタックのチャンスが巡って来なかった脇阪。「今回は実のところ朝からあまりいい流れを感じることはできませんでした」と口を開いた。「ここに来る準備作業として、もう少しそれぞれの気持ちを落ち着かせながら挑みたかったですよね。鈴鹿以降、トラブルを引きずったままレースをしている感じなんです。前回の富士で話した“ムシ”は居なくなったかもしれませんが、もてぎのテストでも何かしらのトラブルを抱えていたので、あまりまともに走れていないんです。そういう雰囲気の中でオートポリス戦を迎えた、ということです」と厳しい表情を見せた。

一方で、自身の経験をチームに反映しきれなかった、という悔しさもあった。「焦った気持ちを落ち着かせる、という作業が必要だったと思うのですが、それが今回は僕も含めて足りなかったような気がします。これからは、チームに根付いてくるであろう大切な“何か”の部分を追求していかないといけませんね」と自ら分析して見せた。そして、厳しい条件となってしまった決勝に向けて、「レースファンの皆さん、スポンサーの方々に向けて、印象に残るレースをして、今日のこの悔しい思いを、明日笑って終われるような結果に変えたいですね。レースは何が起こるか分かりませんから、とにかく全力で挑みますよ」と意気込みを語ってくれた。



■ 9月30日(日)

09:20-09:50 フリー走行(10:00-10:20 サーキットサファリ) →キャンセル

11:00-11:30 フリー走行(変更後) →キャンセル

14:00- 決勝(65周)

【フリー走行】 11 番手 / 1'56.717

台風の行方が気になる日曜の朝。九州地方から進路を外れたことで、オートポリスへの直接的な影響は軽減されたが、午前 9 時 20 分からのフリー走行は雨と濃霧による悪天候のため、セッション開始からほどなくして赤旗が提示される。その後、しばらく天候の回復を待ったが一向に改善することがなかったため、このセッションは一旦キャンセルされ、午前 11 時から改めて 30 分間のセッション実施となった。しかし、変更時間を迎えてもなお視界不良が続き、再びセッションがキャンセルされ、クルマの確認作業ができないまま決勝レースを迎えることとなった。

一方で、セッション中止の代替えのファンサービスとして、グランドスタンド前のコース上でドライバーが観客の皆さんにむけてメッセージを発信。あいにくの天候にも関わらずサーキットに足を運んでくれた人たちとの交流をしばし楽しんだ。



【決勝】 5 位 / 6 ポイント獲得（シリーズポイント：49 ポイント、シリーズランキング：3 位）

迎えた決勝レース。次第に天候が好転し、スタートを目前とした午後 2 時には薄曇り、小雨へと変わっていく。しかし、雨をたっぷり含んだコース上の安全を優先するため、レースはセーフティカー（SC）の先導によるスタートを採用。GT500 最後尾という悪条件の中、スタートドライバーを務める石浦選手は SC 退去後の水煙が立ち上る中、クリアスタートを決め、ひとつまたひとつとポジションアップを見せる活躍を見せた。

その後も石浦選手はコースコンディションの回復に合わせ、ペースアップに成功。安定した足下を味方にして力強い走り続けると、自ずとポジションも浮上。その時点でのファステストラップをマークしつつ、逆転のチャンスを伺い続けた。

レースはその後、上位陣が 24 周をメドにピットインする車両が続出。7 番手までポジションアップしていた No.39 DENSO KOBELCO SC430 も 25 周を終えてピットイン。30.5 秒のピットワークで脇阪選手をコースへと送り出した。ルーティンワークで慌ただしく順位が入れ替わる中、脇阪は気迫のこもった走りでもの競り合いを繰り広げ、前後のライバル達とのバトルを展開。ペースも上がり、申し分のない“攻めの走り”を披露した。

だが、ここでハプニングが発生。なんと好調に走っていた No.39 DENSO KOBELCO SC430 が 37 周を終えて緊急ピットイン。唐突な状況に騒然となったが、脇阪自身はすでにクルマの異変を感じとり、チームには無線で状況を伝えていた。ピットでは再び 4 輪すべてのタイヤ交換を行い、脇阪を再びコースへ。不運にも左リヤタイヤのスローパンクチャーによるアクシデントに見舞われた No.39 DENSO KOBELCO SC430 は、14 番手まで順位を落とすことになったが、そこからサーキットを沸かせ

る「脇阪劇場」が幕を開けた。

コースに戻った脇阪は、水を得た魚のごとく、また見舞われた不運を払拭する怒濤の走りを披露。レースはチェッカーを受けるまで終わらない、という強い意思をもって周回を重ねていく。43 周目にはチームベストタイムとなる 1 分 47 秒 389 をマーク。さらにどんどんペースアップを果たし、50 周目には新たなファステストラップとなる 1 分 46 秒 950 を叩き出す。その一方で、雨量も大幅に減ってコースコンディションが回復。不安定な状況下でも力強い走りができる No.39 DENSO KOBELCO SC430 は脇阪の手によってさらにパワーアップ。8 番手までポジションを戻した 56 周目にはこのレースのファステストラップとなる 1 分 46 秒 861 をマーク！ 他を寄せ付けない異次元の走り続けた。

レースはチェッカーまで残り 5 周を切り、5 番手まで浮上していた脇阪。緊迫した攻防戦は最後の最後まで続いたが、65 週の戦いを 5 位でフィニッシュ、厳しかった戦いに幕を下ろした。

ランキングトップにつけていた No.1 GT-R が今回のレースで優勝したことにより、最終戦を残してシリーズチャンピオンが決定してしまっただが、2 位以下はまだ渾沌とした状態。ランキング 3 位のまま、No.39 DENSO KOBELCO SC430 は最終戦にすべてをぶつける。



様々なドラマがあった決勝レースを終えた脇阪。「今日は色々なことがありました。チームとして一所懸命ガンバって追い上げるレースをしました。石浦選手がポジションを上げて戻ってきて、僕もいいペースで走っていたのですが、不運にもスローパンクチャーに見舞われてしまいました。アンラッキーだったと思いますね。しかし、その後はものすごくペースも良く、プッシュし続けることができました。しかし、結果は 5 位に終わり、1 号車にタイトルを決められてしまったことはとても残念です。でもその一方では、ランキング 2 位を目指した戦いがありますし、SC 勢のトップを獲るという目標も残っています。もてぎに向けて、チームとしてやることをやり、しっかり準備して、来シーズンにつながるいい戦いをしたいですね」と脇阪の目はすでに最終戦に向けられていた。

次戦は、10月27日(土)・28(日)にツインリンクもてぎ(栃木県芳賀郡)で開催される。



